企画趣旨

稲葉　光行（立命館大学政策科学部　教授）

稲葉　それでは本日の午前の部の企画である招待講演に入りたいと思います。立命館大学政策科学部の稲葉と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今年の総会の「混合研究法」というテーマは、私の方から提案させていただきました。昨年度の人間科学研究所の総会では、「働く女性のための支援」というテーマで、一般の方に研究所の活動をご理解いただき、また一般の方々と共に問題を考えるという位置づけで実施されました。それを受けて今年度は、人間科学研究所で行われているさまざまな研究プロジェクトが、そもそもどのような視点から社会的な課題を捉え、どのような方法でそれらを解決していこうとしているのかという根源的な問い、あるいは哲学的な視座から振り返る場を持ったほうがよいだろうと考えました。そこで最近、社会科学、医療、看護、教育学など、人間科学にかかわるさまざま領域で注目されている「混合研究法」という新しい枠組みをもとに、研究所で取り組んでいる活動を振り返るという提案をさせていただきました。混合研究法は、単なる研究の１テクニックではなく、複雑な社会問題を量的アプローチと質的アプローチの両方から捉え、その結果を統合することによって、いわゆる「1 + 1 = 3」という第３の知見を得ることを目指す方法論です。つまり１つのアプローチや視点では理解が困難であった現実問題を、深いレベルで理解し、これまでに無かった解決策を見つけ出すことをめざす、現実に根ざした研究アプローチの新しい潮流です。

本日の午前中の企画では、まず抱井尚子先生にご講演をいただき、そのあと八田太一先生にご講演をいただきます。抱井尚子先生も八田太一先生も、日本混合研究法学会の理事メンバーでおられます。実は司会を務めさせて頂く私自身も日本混合研究法学会の理事メンバーであり、抱井先生、八田先生の両先生と私は、一緒に学会を創立したメンバーでもあります。従って本日の午前中の部は、研究の方法論や社会問題に迫るアプローチについて、ある意味で日本混合研究法学会をあげて考える場でもあると考えております。ご講演の前に、先

生方のご紹介と、講演をお願いした趣旨について簡単に説明をさせていただきます。

抱井尚子先生は、青山学院大学国際政治経済学コミュニケーション学科教授でおられます。また抱井先生は、先ほど紹介させていただいた日本混合研究法学会の初代理事長でおられます。それから抱井先生は、『Journal of Mixed Methods Research（JSMMR）』という、混合研究法に関する国際的なジャーナルの編集委員もされておられます。参考までに、この雑誌は人文社会分野でインパクトファクターが世界１位という、大変権威ある雑誌です。抱井先生のご専門は、混合研究法、多文化ヘルスコミュニケーション、異文化コミュニケーション等です。抱井先生の略歴の最後に書かれている近著の『混合研究法入門：質と量による統合のアート』（医学書院、2015 年）は、日本の研究者が初めて書いた混合研究法に関する体系的な入門書となっております。他に混合研究法に関する著書、論文等多数ございます。さらに補足させていただきますと、抱井先生は約 20 年前にハワイ大学のガン研究センターにおいて行った、ガン告知に関する研究で、量的アプローチと質的アプローチを統合して第３の知見を得るといった、混合研究法の先駆け的な研究をされました。本日抱井先生には、「混合研究法の理論編」という演題でご講演をいただきます。混合研究法とはどのようなものであるのかということをご理解いただいていない方もおられると思いますので、この理論編において、混合研究法の基礎的な考え方も含めてできるだけ分かりやすい形でご講演をいただくようにお願いをしております。また、混合研究法がどういうスタンスから社会問題にアプローチしようとしているのかもご紹介いただければと思っております。

抱井先生に続いて八田太一先生にご講演をいただきます。抱井先生による混合研究法の概要を受けて、八田先生には、人間科学研究の実践において具体的な問題に取り組む中で、どういうデータをどう合わせ、そこからどういう新しい気づきを得るのかと言った、実践例についてご紹介いただくことになっております。

講演の前に八田太一先生のご紹介を簡単にさせていただきます。八田太一先生は、現在、京都大学 iPS 細胞研究所上廣倫理研究部門で特定助教をされておられます。先程ご紹介させていただいた通り、日本混合研究法学会の理事でお

られます。訳書として、『混合研究法の基礎：社会・行動科学の量的・質的アプローチの統合』（西村書店、2017 年）があります。また先ほども紹介させていただいた『Journal of Mixed Methods Research』という、人文社会科学系では世界で最もインパクトファクターが高い雑誌に、日本の研究者として初めて採択された論文の第一著者が八田先生です。この八田先生の論文「日本の文脈におけるガン治療に関する臨床的対話調査のための修練的混合法デザインにおけるクロスオーバー混合分析（Crossover Mixed Analysis in a Convergent Mixed Methods Design Used to Investigate Clinical Dialogues About Cancer Treatment in the Japanese Context）」に掲載されている混合研究法の実践例を元に、量的研究と質的研究の統合、いわゆる「1 + 1 = 3」のひらめきがどういうものであったのかという点について、具体的にご紹介をいただければと思っております。

それでは抱井先生、ご講演をどうぞよろしくお願いいたします。